

越谷市内の大里に落ちた「越谷隕石」

加藤幸一

百二十年間にわたり先祖代々自宅にて隕石を保管してきた越谷市大里おおざとの中村家の中村 勉つとむ氏の話によると、詳細は次の通りである。

すぐ近くに住む男性が家の中から明け方前のまだ暗い頃に外トイレに行った時、西の方から物凄い音をたてて迫るものがあつた。すごく驚いて「お化けだ」と叫びながら家の中に飛び込んで戸を閉めた。当時の新聞には「火山の噴火したるごとき音響」としている。真つ暗の中で火の玉が轟音ごうおんをたてて飛んできたのである。



中村喜八 (肖像画)

それを聞いた中村喜八氏(祖父の祖父)は恐ろしさの余りに近寄らずにそのままにしておいたが、何日かして恐る恐る落ちた田んぼに行き、一メートル余りの深さになった窪みの中に奇妙な石を発見した。その石は、その後の調査で、重さは4キロあつて、磁石がよくついた。鉄やニッケルが多く含まれているためである。

平成五年(一九九三)に、越谷市郷土研究会の会長・小島 誠氏が越谷に落ちた隕石の事実を越谷市民文化祭の展示部門の展示発表で初めて越谷市民に知らせた※。

平成二十二年(二〇一〇)三月頃、加藤が原田民自氏たみじに隕石の落下時期の調査を依頼すると、国立国会図書館にて当時の新聞記事を発見する。その結果、明治三十五年(一九〇二)三月八日の暁あかつき(当時の意味は、明け方前の暗い頃)とわかる。

越谷市郷土研究会として令和三年(二〇二一)に国立科学博物館を通して茨城県つくば市の研究機関に持ち込み鑑定を依頼する。その後、国立極地研究所や九州大学の地球惑星科学部門にも送られる。隕石を分析するためにスライスして切り取り、サンプルを取り出して調査研究した結果、越谷隕石は火星と木星の軌道の間を公転している小惑星由来で、四十五億八千万年前の太陽系形成直後のものと判明する。

令和五年二月十六日、「越谷隕石」として国際隕石学会に承認される。

越谷隕石は、国立科学博物館にて令和五年七月十一日から八月二十一日まで展示公開され、八月二十三日に中村家に返却された。

※平成5年 第25回 越谷市民文化祭 越谷市郷土研究会展示発表の「越谷に落ちた隕石 小島 誠」

また、隕石が落ちたのは「明治35年3月15日の深夜の二時頃」と伝わる。地元では「星のある家」と呼ばれている。夜空の星から落ちてきた石を持つ家という意味か。

越谷隕石

越谷市内の大里に隕石が明治35年3月8日夜明け前の暗い時に田んぼに落ちた。

次の明治三十五年四月二十五日付『東京朝日新聞』の提供者は原田民自氏です。

●埼玉縣の隕石 去月八日頃なりき埼玉縣南埼玉郡にて曉の頃火山の噴火したる如き音響ありしが其後同郡櫻井村大字大里にて中村喜八といふ人の所有に係る陸羽街道の東側の田に大穴の生じたるを發見し四尺餘の底より奇石を掘出し昨今見物群集すといふ

明治三十五年四月二十五日付『東京朝日新聞』（原田民自氏提供）

●埼玉縣の隕石 去月八日頃なりき、埼玉縣南埼玉郡にて 曉の頃火山の噴火したる如き音響ありし

そのごとうぐんさくらむらおほあざおほざと なかむらき ひと
が其後同郡 櫻井村大字大里にて中村喜八といふ人
しよゆう かゝ りくうかいだう ひがしがは た おほあな しゃう
の所有に係る陸羽街道の 東側の田に大穴の生じた
はつけん しゃくよ そこ きせき ほりいだ さくこんけんぶつ
るを發見し四尺餘の底より奇石を掘出し昨今見物
ぐんしふ
群集すといふ
(文章は加藤幸一が作成)

去月八日 先月八日 三月八日

「曉」(あかつき)とは、当時は「明け方前」の真つ暗な頃をさす。

「火山の噴火したる如き音響」とは、ものすごい衝撃波だった?